

雪は降る

カーステレオがトンバーラネジェとフランス語で歌いだしたときは、冗談かと思っただ。

FMの地方局だから、俺の目の前に広がってる光景とさほど違わないものを目の当たりにした誰かがその曲をリクエストしたのだろうが、悪い冗談だ。

うつすらとだが、まっさらな雪が毛布のように紺色のアスファルトを覆い隠している。正月休みも終わり、ただでさえ行きたくない会社に向かおうという弱弱しいやる気が今にも砕け散りそうだ。

坂の多い長崎は雪にはすごく弱い。市内では数年に一度微かに積もることがある程度だから、スタッドレスタイヤなんて持つてる人間はいないし、チェーンを持つてる

ドライバーも、県外の雪山にスキーに行くのが趣味だという人以外あまりいないと思う。

もちろん俺もそんな気の利いたものは持つていないし買おうという気がおきたことも無い。

そんな俺の家の前はいきなり坂道だ。普通は右折して上り坂を登っていくことになるが、スカイラインのリアタイヤが空転して上れない。4WDのGT-Rならいけるだろうが、雪に一番弱いFRではどだい無理な話だ。

今日は車で行くのは無理そうだ。

俺はドアを開けて氷のような空気の中に降り立つと、ヘルメットを取りに部屋に戻った。

原付スクーターで、両足べたべた着きながらなら何とか上っていけるだろうと考えたのだ。

上ったら下らないといけませんが、バイクで滑りやすい道を下る怖さはあえて考えな

いことにした。遅刻したくなければ、それを考えてはいけない。致命傷になる。

他に方法がないのだから仕方がないのだ。バスも運行していないのは、大通りにもタイヤの後が皆無なので歴然だ。不意の雪にチェーンの準備もしていなかったのかもしれない。

薄暗い部屋の中、ステレオスピーカーの上に置いてあった、埃まみれのフルフェイスヘルメットを取り上げると、車庫に戻った。

車庫の奥からホンダのスーパーカブ80を引っ張り出していると、女の子の悲鳴が聞こえてきた。

急いでいってみる。

車庫から顔を出してのぞくと、坂で転んだ女子高生がスカートをやウエストまで捲り上げ、ピンクの薄い生地パンツ丸出しで俺の目の前に滑り降りてきた。

仰向けになってぼっちゃりした腹の下で股間を隠してる薄手の布は、その下に生え

ている黒々とした陰毛を隠すにはやや無理があるようだ。

カットされたあと、生えかけてる短めの毛までがつつすらと見えていた。

とっさのことで足を閉じることもままならなかった彼女の股間はがら空きで、中心の縦長いくぼみがくつきりと布で形作られているのまで確認できた。

怪我はないかな、と思うより先にいいもの見てしまったと俺が思ったからって、批難されるいわれはないと思う。男なんてそんなもんだ。

しかしもちろん俺は彼女に手を差し伸べた。

「だいじょうぶね？」決り文句というのはこういうときには都合が良い。何も考えなくてもすんなり出てくるから。

女子高生はゆっくりこつちを向いて、俺の顔を見た。

自分の下半身の状態を気付いてるんだろ、すでに顔は真っ赤だ。

「きゃあ、エッチ」

彼女は俺の差し出した手を乱暴にはらうと、ぎこちない様子で立ち上がり、坂を上らずに下っていった。

服も汚れてしまったし、恥ずかしいしで今日のところは学校をサボることにしたのかもれない。先のT字路を左の曲がる時、再びしりもちをついていた。

かすかにかび臭い匂いがするヘルメットをかぶり、スパーカブのセルボタンを押す。

バッテリーが弱ってるようで、今にも止まりそうな弱々しいセルの回転音の後、以外に力強くエンジンがかかってくれた。さすがにホンダ製のエンジンだ。

しかし磨り減ったタイヤは食いつきが悪い。

シャーベット状になった路面で空回りするだけで、少し登っては滑り落ちる事の繰り返し。両足に力を入れてるからだんだん身体が熱くなって、フルフェイスヘルメットのシールドまで白く曇ってきた

というのに、家の車庫から三十メートルほど登っただけだ。

表通りは一面真っ白な雪に覆われていた。足跡ひとつ、タイヤの後もまったくない。パージンスノーってやつだ。

両足を着きながら坂道をカブで登っていると、再び雪が激しくなってきた。

フルフェイスヘルメットのシールドを下ろして走っていると、すぐに雪で前が見えなくなる。左手で雪をはらっても十メートル行かないうちに、また目の前は真っ白になる。

次から次に降り積もる雪にカブのリアタイヤもグリップできずに横滑りをしながら空転する。

やはりバイクでも無理か、今日は休んでも欠勤扱いにはならないかもしれないから、会社行くのは止めておくか。

そんな弱気の虫に、やる気が食い尽くされようとしている時、後ろに誰かの気配を感じ

じた。誰かが、がしつと荷台を握って押し始める。

リヤタイヤがグリップしてするする登り始めた。

しばらく登って、斜面がなだらかになつたところで止まり、振り向くと、さっきの女子高生が白い息を吐きながら笑いかけた。

「さっきはごめんなさい。あんまり恥ずかしかったので……」

女子高生は、さっきのあられもない自分の姿を思い出したのか、顔を赤くしていた。「いいさ。それより、後ろに乗らないかい。君が乗ってくれた方がリヤタイヤに過重がかかって食いつきが良くなるみたいだ」

俺の言葉にその娘は素直にうなずいた。そして、短めのスカートを気にしながらも、案外大胆にカブの荷台に跨った。密着した方が安定するからと言って俺の身体に抱きつくように言う。

「お尻痛くないかい」

「大丈夫。さっきの尻餅でも平気だったんだから。お肉がたくさんついてるのかな」

俺の身体に手を回して身体を擦り合わせる女子高生の声が耳元に響いた。

エンジンをふかすと、先ほどまでとは打って変わって力強くグリップしながら、ゆつくりとだが進み始めた。

「こんな日に学校行かなくてもいいんじゃないの」

よほど大事な授業があるんだろうか。「今日はいろいろあるんです。テスト、はまあそれほどじゃないけど、友達から告白したいから付き合っかって言われてるし、他にもいくつか外せない用事があって」

サラリーマンだろうが女子高生だろうが、大雪の日でも行かなければならない時はあるということか。

もう少しで峠越えというところで、少し斜面が急になっているところがあり、そこがなかなか上がれない。

一旦止まってしまつたりリヤタイヤは空転するだけで、下手をしたら後ろにずり下がっていきそうだ。

「ごめん、降りて押した方がよさそうだ」

彼女を下ろして、俺も降りた。

「ここは無理かもしれませんが、ここに止めて歩いた方が早いかも」

彼女の言うのが正解だろうが、ここまできて愛車を置き去りにする気は到底おきない。

「ここを越えれば後は平たい道だからね」足が滑るから腰が入られなくて力が入らない。それでも何とか少しずつ前に進んでいく。

「押しますよ」

彼女が荷台を押ししてくれた。

カブのエンジンが唸って、排気ガスが白く噴出す。

空転したリヤタイヤの上げる泥水が彼女の白いソックスを汚すのが心苦しい、が、もう少しなのだ。ごめんな。心の中で誤って前を見つめた。そのときいきなりタイヤ

が横滑りして、車体が真横を向いた。そのままグリップした後輪がバイクをかってに横方向に押しやっていく。

おいおいそっちは違うだろというまもなく、バイクは側溝を乗り越えて敷の中に突っ込んでいった。降りて押ししていた俺は、そのバイクのあばれっぷりを口をぼかんと開けて眺めるだけだった。

彼女はというと、腹ばいに倒れて、ミニスカートを持ち上げていた。さっきはピンクの透き通るくらい薄い生地をやつたが、今度はグリーンと同じようなデザインのやつだった。3色セットで九千八百円ってやつだろうか。

「おまえな、他にパンツ持ってないの」
俺が手を貸してやって、彼女を引き起こす。

彼女は2度目で免疫ができていたのか、それほど恥かしがりもせず、ふんつと鼻で返事しただけだった。

ハンカチで濡れた制服の前を吹いてやる
と、案外素直にありがとうといった。

さっきは友達の告白に付き合うなんていっていたが、どうも怪しい。

彼女自身の告白じゃないのかな。
別にどうでも良いけど。

「しかし、こんなに寒いのにどうしてミニスカートなんだよ。もう少し長いもの持っていないの？」

「膝下十センチも膝上十五センチも、大して変わらないのよ。おじさんは履いたことないから知らないでしょうけど」

確かにそつだ。ミニスカートをはいたことは、忘年会の余興を含めても三十七年間一度も履いたことはなかった。痛いところをついてくる。

「とにかくバイクがこれじゃあ今日はやめておくしかないな」

腕組みして言う俺の腕に、彼女は取り付くようにした。

「ちょっと、ここまできて諦めるの？」

「君もまた服が汚れちゃったじゃないか。諦めるよ」

「いやだ。ここまできたら根性出すわよ。振られたってかまうもんですか」

微妙に問題がすり変わってる気もするが、この年代の女の子にしては普通なんだろうな。

「じゃあバイクを引っ張り出さないよ」

俺が側溝をまたいで敷に入っていくのを彼女は目で追っていた。

力仕事を手伝うつもりなのか、カバンを離れたところにおいている。

敷に突っ込んだバイクは特に異常はないようだった。パンクもしていない。

ハンドルを持って引き起こす。ギヤを二ユートルに入れるのに手間取ったが、何とか入れると、バックする形で側溝の脇まで来た。側溝にはふたのある部分とない部分があった。ふたのある部分まで押して、そこをまたいだ。

彼女も後ろから押して手伝った。

空は暗くなってそのくらい空から小粒の雪がポトポト落ちてきた。

彼女の髪に雪が積もる。

「だいじょうぶ？ 寒いだろ」

「そう思うんだったら早くエンジンかけてよ」

エンジンはすんなりかかった。静けさがどんどん積もっていく中、ぼろぼろと頼りないエンジン音だけど、今はとてもたくましく思えた。

エンジン周りに付着した雪が解けて、水蒸気になって上がっていく。

この氷の世界の中で唯一の命の火だ。おまえはいつもはダサイおっさんバイクと軽蔑されているけど、今だけは俺たちのヒーローだぞ。

俺は少し涙ぐんでバイクにまたがった。エンジン熱で手を温めていた彼女がすぐに後ろにまたがる。

それからは面白いうように、坂を上がっていった。新雪のほうがグリップが良いからかも知れない。

そしてようやく坂を登りきった。

「やったねおじさん、後は下りだから早いわね」

女の子が、俺の中の恐怖心に気づきもしないでニッコリ笑った。

バイクはフロントタイヤがすべれば、足をすくわれてあっさり転倒するのだ。

自分ひとりなら転んでもどうってことないさと開き直れるが、女子高生を道連れにするのはいかなものだろうか。

「どうしたの？ 行かないんですか」

彼女のあどけない瞳に、俺の心も決まった。

何とかなるさ。俺はエンジンをふかしてカブを発信させた。

二人を乗せたカブ80は力強く走り出した。

しばらく平坦な道が続く。雪で真っ白な道はこのまま天国まで続いているみたいだった。それならそれでも良いのになあ。

この緑色の薄いパンツをはいた可愛い女子高生と一緒になら、それも悪くない。

そして峠越えの恐怖の下りがやってきた。エンジンブレーキとリヤのブレーキだけで、できるだけスピードを殺しながらもよたよたしながらバイクは降りていく。

後ろの彼女がいい重りになっているのか、思ったほどスリッブしなかった。

氷ではなくバージンスノウなものも有利な点だったんだらう。

「君、名前なんていうの」

近所に住んでるのに、めったに見かけない子だった。

「小杉 薫です。あのパンツのことは内緒ですよ」

緊張感で忘れていたこの子のあられもない姿を思い出した。

俺の股間のものが敏感に反応し始める。後ろから手を回している彼女がその変化

に気づいたのか、

「キヤーいやだ」

と体を離れた。

バランスが崩れる。

「危ない、体ば離さんと」

俺の叫び声もむなしく、目の前には雪をかぶったガードレールが迫っていた。

り

雪は降る
おわ
